

前評価のために商人を呼ばねばならず煩雑であり、収穫しながらの方が品質評価が容易、など)や、価格が収穫前と後のどちらで合意されているか(事前評価ができず、かつ収穫前に価格をコミットするなら、商人は品質の不確実性のリスクを負う)、品質や規格に合わせた価格づけがあるか(収穫後に品質ごとの価格×重量で清算すればよい)、など現実に即した事実で本章の想定を裏づけてあるとよかった。また、問題の本質は野菜の品質の不確実性なので、品質とは無関係な一般的な市場価格の時系列分散を評価費用の指標とするのは不適切であり、本書が依拠している Leffler and Rucker [1991] のように、品質のばらつきを表す指標を使うのが望ましい。

以上、2点コメントを加えたが、全体としては捉えるのが難しい発展途上経済の農産物流通の実態を描き出した良書である。農業・開発経済、農産物流通、卸売市場制度、商人活動や関係的契約などに関心がある読者に一読を薦めたい。なお、本書に関わる論点の最近の開発経済学分野の文献として、以下も有益だろう。契約栽培や抜け売りは Blouin and Macchiavello [2019]、農産物の品質プレミアムと品質改善は Bold *et al.* [2022]、商人間の競争度は Bergquist and Dinerstein [2020]、Casaburi and Reed [2022]、アフリカの中央卸売市場は Sitko and Jayne [2012]、中央卸売市場の効率性と厚生 of 理論分析については Nyarko and Pellegrina [2022] などがある。

(有本 寛・一橋大学経済研究所)

参考文献

- Bergquist, Lauren Falcao; and Dinerstein, Michael. 2020. Competition and Entry in Agricultural Markets: Experimental Evidence from Kenya. *American Economic Review* 110(12): 3705–3747.
- Blouin, Arthur; and Macchiavello, Rocco. 2019. Strategic Default in the International Coffee Market. *Quarterly Journal of Economics* 134(2): 895–951.
- Bold, Tessa; Ghisolfi, Selene; Nsonzi, Frances; and Svensson, Jakob. 2022. Market Access and Quality Upgrading: Evidence from Four Field Experiments.

American Economic Review 112(8): 2518–2552.

- Casaburi, Lorenzo; and Reed, Tristan. 2022. Using Individual-Level Randomized Treatment to Learn about Market Structure. *American Economic Journal: Applied Economics* 14(4): 58–90.
- Leffler, Keith B.; and Rucker, Randal R. 1991. Transactions Costs and the Efficient Organization of Production: A Study of Timber-Harvesting Contracts. *Journal of Political Economy* 99(5): 1060–1087.
- Nyarko, Yaw; and Pellegrina, Heitor S. 2022. From Bilateral Trade to Centralized Markets: A Search Model for Commodity Exchanges in Africa. *Journal of Development Economics* 157(June): 102867.
- Sitko, Nicholas J.; and Jayne, T. S. 2012. Why Are African Commodity Exchanges Languishing? A Case Study of the Zambian Agricultural Commodity Exchange. *Food Policy* 37(3): 275–282.

南田みどり. 『ビルマ文学の風景——軍事政権下をゆく』本の泉社, 2021, 337+vip.

独特な構成の書物だ。第一章こそ、近代の散文小説誕生から、1990年ごろまでのビルマ文学史を丁寧に整理する。だが第二章から第五章までは、そののちにミャンマーを訪れた著者が目にした文学風景を、さながら紀行書のようにつづっている。

ここに通底する視線は「まえがき」と「あとがき」に書かれているとおりだ。「わたしはひとりの生活者にすぎない」(p.3)。そして「ビルマという他者を語るわたしは、実は自己を語っているにすぎない」(p.335)。現代の日本ではおそらく唯一であろう、ビルマ文学の専門家である著者が、ビルマ文学とミャンマーを通じて振り返る半生の記録として、興味深く読んだ。

もちろん、本書において著者の日常生活が直接的に語られるわけではない。だが、ひとりの小さな人間の小さな声をすくい上げる営みを文学と呼ぶのであれば、ここに響くのは現地の作家たちや市井の人々の声だけではない。日本人としてビルマ

文学にかかわる自分自身が踏みしめる足下を、真摯な態度で見せる著者の声も聞こえてくる。その意味でも本書はやはり、文学紀行書と呼ぶのがふさわしいだろう。

第一章「軍事政権下への文学的道程」では、日本占領期から国軍支配の時代までの文学的潮流の変遷が、時系列に沿って語られていく。支配の主体が変われば社会の規範も変わる。それは文学作品にも大きな影響を与える。

著者は、1989年に軍事政権が採用した「ミャンマー」という国名およびそこに想定される「ミャンマー文学」という語の孕まれた理念と、その実態の撞着を指摘したうえで、ビルマ語によって書かれた文学を「ビルマ文学」と呼んで論を進めていく。

1930年代に、現実を平明に写実する「キッサン」と呼ばれる文学が現れ、古典と翻案ものからの大きな質的転換が起こる。あわせて反英反植民地主義ナショナリズムにもとづく作品も登場するが、1942年からの日本占領によって主題がさらに変化する。「暗黒時代」とも呼ばれるこの時期には、ビルマ人としての意識向上を訴える啓蒙的小説が増える一方、日本軍のプロパガンダ的物語は忌避された。

占領が終わると、内戦が始まる。テインペーミンのように、被抑圧者階級解放のための武器として文学を捉える主張と、芸術性を重視する主張が対立する。「戦後文学」は、娯楽小説、リアリズム（人生描写小説）、女性作家の作品、抗日闘争文学、さらに内戦文学へと、多様な発展を遂げた。

1962年にビルマ社会主義計画党の一方独裁時代となると、政権は「国民文学賞」の創設など、文学へのてこ入れも図る。ビルマ軍の主導による抗日が強調される小説や、抗日戦線におけるビルマ族と少数民族の友好が描かれる作品が登場し、これらの「神話」によって史実が再編されていく。

1970年代。国土は分断されたまま、文学への統制はさらに強化され、政治的主張を排した人生描写小説が増える。抗日小説は舞台を戦後に移し、国家を分裂から守る国軍の活躍を描く愛国小説へ変態する。文学の階級性を説く左翼的潮流は衰退していった。

1988年の民主化デモと鎮圧を経て、新たな軍事政権の支配体制が確立する。言論統制と長引く貧困の影響を受けて、日常の細部を語るしかできない長編作品が力を失い、短編小説の時代となる。同時に、長らく少数派であった女性作家たちの活躍が目立つようになる。90年代に入ると、人生描写小説のリアリズム的傾向と対立する形で「モダン」と呼ばれる潮流が登場してくる。

こうしてビルマ文学の歴史を1世紀近くにくわたって振り返ったのちに「モザイク鏡」と題された短い節が差し挟まれる。「他者は自己を映す鏡だ。かわりを持つ他者が増せば、それだけ多様な自己が鏡のモザイクを形成していく」（p.90）と述べる著者が、1990年代以降に、ビルマ文学（とそれを担う人々）というたくさんの「モザイク鏡の小片の堆積の中に分け入っていった旅の記録」（p.91）へと、語りが変化していく。

なお、このいわば「紀行編」においては、それまでの「歴史編」で挙げられた事実関係の細部が補われていく。特に女性作家たちについての記述が、第一章ではやや唐突で浮いて感じられるが、第二章以降に与えられる豊かなディテールによって補完されていくようで、興味深い。

第二章から第四章までは「軍事政権下をゆく」と名付けられた章題に、それぞれ異なる副題が与えられる。第二章「渦動」は、1993年から1999年までの旅の記録だ。

この章で、著者は何度もアウンサンスーチー邸に赴く。1995年には14分間の面会を果たす。彼女の伝記を書くことになったのをきっかけに、多くの女性活動家や作家に聞き取りをする。共産主義を信奉して地下活動に赴き、投獄されたキンミョウユニョン、日本時代以上に厳しい言論統制の下で雑誌を作るキャリア。無邪気ともいえるナショナリズムで軍事政権派と目される作家マ・サンダー。

異なる主義主張の彼女たちもみな、発展と貧困の格差が激しく広がる社会に暮らす。困難にあえぐ民衆は、怒りを政府への闘争に振り向けることもできず、ただ耐え忍ぶ。著者は政府が授与する文学賞授賞式に参列してその空虚さを目にする。大物作家たちが海外に亡命する。絶望的な状況にも感じられるが、詩を書く若者が増えているとの

言葉も耳にして、そこにわずかな希望を抱く。

第三章は2000年から2003年を描く「稽留」。渦巻いていた変化の兆しが、そこからどこへも行けずに滞ってしまう。

著者は、作家テインペーミンの作品舞台や、彼の抗日闘争の足跡をさまざまにたどっていく。インレー湖やチャウンターなど、閑散とした観光地を回る途中では、強制労働に従事させられているとおぼしき人々を目にする。上辺の開発とインフラ整備の裏では、変わらず経済的困難に不満を覚えるひとたちがいる。大学は辺鄙な場所に移設され、教育内容は不十分だ。検閲はさらにエスカレートして、一般的な用語すら差し替えられてしまう。著者がたどる作家の長い苦闘の旅路と、現代の息苦しさが重なって、評者は胸が締め付けられるようにすら感じた。

のちに著者は、ヤンゴン大学ビルマ文学科に、在外研究員として派遣される。日本占領期の文学にかんする資料を収集しようとするが、閲覧も複写も満足にできない図書館、軍事政権とつながるせいで優秀な知識人が距離を置いてしまう大学、あらゆるプロセスが遅々として進まない役所の仕事に苦勞する。

第四章は2004年から2007年の「臨界域」だ。人々の不満を蓄えてきた社会の相が転移しようとする瞬間を記す。

印象的なのは、第二章以降、著者がたびたび会いに行く女性作家ルードゥー・ドー・アマーの存在感だ。「人民（ルードゥー）」を冠した出版社の主幹たるマンダレーの「肝っ玉おっ母」（p.102）は、いまだに舌鋒鋭く、人々を勇気づける。

著者は、2006年からの新首都ネーピードーも訪れる。地図を買おうとすれば止められるほどに「秘密の匂い」（p.258）の濃い、新しい街。「生活の匂いは希薄だ」（p.257）というひとことに、これまで著者が現地の人々と交わる中で見てきた生き方と、政権が作り出す幻想との乖離が見て取れる。愛国心の昂揚に貢献する小説と、そういった価値意識を拒否して、検閲をかわしながら執筆される作品との「二極分解」（p.252）が進む文学状況にも、通ずるものがある。

2007年8月に、88年の指導者たちが続けて亡く

なる。入れ替わるように、9月には若い僧侶と民衆たちを中心とした大きなデモ行進が起こった。激しい弾圧があり、日本人記者も命を落とす。そしてさまざまな規制が強まっていく。だが、この時代の相転移に、著者はかすかながらも希望を見出していく。

そして最終第五章「『民政移管』のあとさき」では、2008年から2020年までの「ビルマの日々」を一気に振り返る。国内状況も、著者を取り巻く環境も、まさに怒涛だ。2008年のサイクロン・ナルギスの被災地をまたたく間に駆け抜けて、支援が行き届かないさまを目にする。検閲はさらに強化され、サイクロンにかんする報道も、反抗する詩人たちの言葉も制限される。厳しくなる統制の中、著者自身のビザ申請も却下される。

だがそんな受難を「この国のもの書く人びとと、ようやく同じ地平に立てた」（p.285）とあっさり言ってしまう著者は、シンガポール、チェンマイ、クアラルンプール、ベナンといった周辺国のミャンマー・コミュニティを回る。そうこうするうちに2011年の「民政移管」が訪れ、ビルマ文学をめぐる旅も再開される。2012年には検閲が廃止され、出版界の動きも活発になる。講演会や朗読会の開始、SNSでの作品発表、アウンサンスーチーや共産党についてのノンフィクションの出版、発禁小説の再版など、ここまで描かれてきた閉塞状況とはうってかわるようだ。低迷していた長編小説も動き出し、その内容も、深刻な現実を描くリアリズム、SF的作品、大胆な性描写のある作品、歴史小説など、多様だ。

だがすべてが楽観的なわけではない。「アウンサンスーチー政権」成立後も国軍は強い力を握り、言論状況も不安定だ。政権党も不用意に文学側と距離を縮めていき、著者の不安がのぞく。そして、ロヒンギャ問題についての政権やメディアの沈黙と国内混乱の状況を整理したのちに、著者は本書でたびたび触れてきた問題意識に立ち返る。かつてのビルマの地に踏み入って蛮行をおこなった国家の、軍事政権に承認を与えてODAを供与してきた国家の人間として、ミャンマーとどのようなかわりを持っていくべきか。種々の問題を含む『ビルマの堅琴』を引き合いに出して、日本側に欠落

した「ビルマ人へのまなざし」(p. 331)を指摘し、本書は閉じられる。

本書はこのように、ビルマ文学の長い旅路と、著者自身の長い旅路を追う書物だ。だがその構成ゆえに、一読者としてわずかに記述の不足を感じる部分もあった。

第一に、事実関係が整理され、並べられていく本書においては、個々の作品や作家についての記述がどうしても不十分になる。著者が研究を続けてきたテインパーミンはたびたび言及され、その人生やいくつかの作品についてもやや踏み込んだ記述があるが、限定的なものに留まっている。

そして第一の点とも大きくかわるが、社会的・歴史的背景と文学の関係にフォーカスされていくため、ビルマ文学の物語論的特徴や、種々の文学理論によるアプローチの可能性などが捨象されている。

たとえばひとつ細かいことを書くと、90年代以降に登場する「モダン」派と呼ばれる文学的流行が、具体的にどのような物語・文体的特色のものなのか、しっかりと把握できないままに話が進んでしまう。87-88頁での言及は、自由韻詩としてのモダンのみに留まり、散文におけるモダンがなんなのかはきちんと説明されない。

そうこうするうちに作家ターヤー・ミンウエーを紹介する253頁には「ポストモダン擁護の論陣を張る」という記述がなされており、ビルマ文学におけるモダン／ポストモダンとは一体どんな特徴をもつのか、そういった文学作品に対してポストコロニアルな、あるいはポスト冷戦的な批評のアプローチは可能なのかどうか、読者にはほとんど手がかりが与えられない。

ただこれは「東南アジア」の文学を読もうとする人間が必ず突き当たる問題でもある。微に入り細を穿つような専門的研究のためには、まず総合的な知が、すなわちその風景を読み解いていくための見取り図が必要だ。だが東南アジアの多くの地域の文学において、きちんとした見取り図はほぼ存在しない。数少ない研究者が現地に分け入って、まず経験から描いていくしか手段はないのだ。

その意味で本書は、ビルマ文学の風景を丁寧に描く貴重な見取り図であり、その描き手自身の姿

を映してくれる鏡でもある。こういった書物が書かれることで、東南アジアの文学を志す次の世代が、安心して一步を踏み出すことができる。そこはまだ未開の領野のような場所かもしれないが、そこで多くの作家たちの声を聞きながら「生活」をしてきたひとがいるという事実が、勇気を与えてくれる。

(福富 渉・タイ語翻訳・通訳)

廣田 緑、『協働と共生のネットワーク——インドネシア現代美術の民族誌』grambooks, 2022, 8+495p.

本書は、インドネシアにおける現代美術家と美術界のプレイヤーたちについての民族誌である。著者は、1993年から2010年までインドネシアの美術家として活動し、帰国後もインドネシアに赴いての調査を含め、様々な形で聞き取りや参与観察をおこなった。執筆にあたって著者は、『インドネシア美術史 *Sejarah Seni Rupa Indonesia*』[PPPKD 1979]を「インドネシア人によるインドネシアの“精神の美術史”として貴重な文献」(p. 35)と位置付け、それを著した「インドネシア人研究者と意見を同じくして、インドネシアの精神性を合わせて記すよう意識した」(p. 35)としている。自らの経験と調査および数多くのインドネシア語の文献を活かし、当事者のまなざしに重きを置いて、インドネシア近現代美術を政治経済に深く関わる社会的動態のなかにとらえている。

民族誌を書くことに加え、本書は、著者が現地で「収集した資料」と「美術関係者からの聞き取り」を提示し、インドネシアの事例をもとに「現代美術とは何か、現代美術の社会的役割は何かを問う」ことを目的としている (pp. 28-29)。

第一部「インドネシア美術史の穴埋め」(第一章から第四章)、第二部「スニ・コンテンボレル——インドネシアの現代美術」(第五章・第六章)、第三部「プレイヤーの民族誌」(第七章から第十二章)から構成される。第一部・第二部は、インドネシア現代美術の歴史的文脈に光をあてている。

第一部では、第一章で上述の目的・指針を、第